

グループ③と④の比較

譜例 13 【演奏解釈その2】 第2主題より、グループ③～⑥

P.I.Tschaikowsky

グループ③は先行グループ②と複合グループを成していますが、重心は前述のように5小節3拍目のA音から6小節1拍目のFis音まで広がっています（譜例の↓）。この重心に付加されたエネルギーは6小節2拍目のE音に向かって減衰するのが和声的にも旋律の流れからも自然なのですが、5小節3拍目から3拍間も支え続けた重心のエネルギーをたったE音1拍で減衰させることは非常に難しいと思われまます。つまり③の余剰エネルギーは④まで積み残されていると考えるべきでしょう。

そのように解釈すれば、④の最初に指示された > は③の余剰エネルギーを減衰させるための指示として理解できます。つまり④は③とペアになって大局的な緊張⇒弛緩を表現しているのです。このことは5小節3拍目～7小節2拍目までの和声構造がカデンツ (T-S-D-T) を成していること、さらに④は③を2度下に移高した反復進行 (和声も含めて) で、このような反復進行はエコー効果を意図する場合にしばしば使われる手法[†] であることなどからも推察できます。

以上のことから④の重心は③より比重が小さいと解釈しました。

グループ⑤及び⑥の解釈 ※ 赤字数字部分訂正

グループ⑤の重心はfの指示でも分かるように、④から受け継いだエネルギーが付加された7小節3拍目の和音及び旋律のFis音です。このFis音は③の重心5小節3拍目のA音よりも低くて短い音なのですが、前述のようにフレーズの最初から続いてきた低音のD音が此处で初めてGis音に変化する衝撃的な効果と、借用属九の和音もたらす緊迫感との相乗効果でこのフレーズのクライマックスとして機能していると考えられるべきでしょう。この重心に付加されたエネルギーがいかに大きいかは指示された *ritenuto* によって推し量れます[‡]！

グループ⑤の後半とグループ⑥の旋律はグループ②と全く同じです。したがって⑥の重心は②と同様の8小節3拍目のH音になりますが、一方では⑥はこのフレーズ全体を締めくくる部分として先行グループ⑤の激しい抑揚を沈静化する余韻のような役割を果たしていると考えられます。したがって量的には小さくなくても深い心理的な終止感が求められるグループです。重心の内声に使われている倚音 (Dis音) がこの部分の内向的な凝縮感を見事に表現しています (同じ旋律である②ではこの倚音は使われていないことに注目してください)。

このように②と⑤～⑥は同じ旋律でありながら、その音楽的内容は全く異なる表現を要求しているのです。これらをどのように解釈し演奏のための設計図を作成するか、か指揮者に課せられた使命といえましよう。

[†] 高さを変えながら反復進行するのは基本的な作曲技法の一種ですが、盛り上がる時は高く移行し、収まる時は低く移行するのが一般的な用法です。

[‡] 音量=音価の原則を思い出してください！ 与えられたエネルギーが大きくなりすぎると、音は記譜された音価よりも長くなるように変化し始めます。ritenutoの指示はそのようなエネルギーの変動を要求していると解釈すべきです！ 多くの演奏が重心のFis音をテヌートして長めに表現しているのも、ここに付加されたエネルギーの大きさを実感しているからに他なりません。このような部分的なテンポの揺らぎをアゴーギクといいますが、アゴーギクとはエネルギーの変動によって生じる現象で、書かれた音の高さを勝手に変えることが出来ない楽譜による演奏では必然的に生じる魅力的な表現法です。